



大阪公共図書館協会会報 2025.3 No.177

## 第72回（2024年度）大阪公共図書館大会開催 つながる図書館

第72回大阪公共図書館大会は「つながる図書館」をテーマに、12月18日（水）、大阪府立中央図書館2階 多目的室にて開催されました。

大阪公共図書館協会の田中会長による開会のことから、会場館である大阪府立中央図書館の大庭館長よりご祝辞を賜り、始まりました。

プログラム内容は、午前2件は研究委員会発表、午後は基調講演と3館からの事例報告でした。

研究委員会からは、令和5年・6年度の2年間におこなった研究成果が発表されました。地域資料研究グループから「地域資料のデジタル化とデジタルアーカイブに関する調査」として、アンケート結果と聞き取り調査をもとに発表されました。2012年の調査と比較しつつ、2024年現在のデジタル化への取組状況や、実施館の声を中心にまとめられ、今後地域資料をデジタル化しアーカイブする参考情報が示されました。学校連携研究グループからは「学校へのアウトリーチサービス」について、人、資料、情報を切り口にした、聞き取り調査をもとに発表されました。学校に長く図書館サービスを届けている各自治体の事例には、アウトリーチサービスに携わる上での視点がつまっており、業務課題の解決につながるものでした。

基調講演は「地域から事業を構想する」と題して、前県立長野図書館長・元伊那市立図書館長の平賀研也氏にご講演いただきました。図書館が地域とつながるために、社会環境の変化へ応える姿勢をもつことや、図書館に求められる社会的な役割を認識し、目の前の課題に柔軟に寄り添い編み直す必要性が語られました。そして、地域の課題から事業を構想する際には、なにとつながり、どう市民へつなげていくか、楽しく試行錯誤するという方向性が示されました。

事例報告では、岡山県津山市立図書館の物流サービスを土台にした3館連携の「津山モデル」、滋賀県守山市立図書館の利用者を専門知識へつなげる「病院連携事業」、泉大津市立図書館の行政・議会・企業連携への営業活動といった3館3様のつながる図書館の取組をご報告いただきました。

最後に、基調講演と事例報告の登壇者4名による意見交換と質疑応答が行われました。図書館現場で連携事業に取り組んでおられる先行館から、様々な事例の実際や、ベースとなる考え方を伺うことができました。それぞれの豊富なご経験をもとにした発表は、示唆に富むものであり、実り多い大会となりました。



### 【研究委員会発表(1)】

地域資料研究グループ  
「地域資料のデジタル化と  
デジタルアーカイブに関する調査研究」

自館所蔵の（行政資料を除く）地域資料のデジタル化およびデジタルアーカイブの運営状況について、大阪府全域の公共図書館（室）にアンケート調査を行い、さらに個別に聞き取り調査しました。その結果をもとに2012年時調査との比較も取り入れつつ発表しました。各館が直面する課題解決の一助となれば幸いです。

- この度12年前の調査結果と比較研究することができたのはOLA研究委員会が長きにわたり、府域の地域資料に様々な角度からスポットを当て研究を重ねてきた賜物だと思います。一端を担えましたことを嬉しく思いますし、これからも一層豊かな研究が行われますことを期待しています。

（豊中市立千里図書館 久山 理恵）

- デジタル化が進み、今まであまり知られていなかった地域の宝が目の目を見るようになりました。今後のデジタルアーカイブの更なる導入と発展に期待しています。委員の皆様、そしてこの度アンケートや個別の聞き取りにご協力いただいた皆様に感謝いたします。

（河内長野市立図書館 森田 智之）

- 今回のアンケートの実施により、大阪府域の公共図書館におけるデジタルアーカイブの現況に触れることができ、貴重な経験となりました。今後も定点観測のような形で継続的な調査が可能になればよいと感じました。ありがとうございました。

（大阪市立中央図書館 山本 優里子）

- 大阪府域の公共図書館のみなさまは、ご多忙のところアンケートへご協力くださり誠にありがとうございました。集計結果では発表で言及した事項以外にも、種別デジタル化資料点数や予算額なども記載していますので、ぜひご参考ください。

（堺市立中央図書館 五十嵐 亮介）

- デジタル化、デジタルアーカイブについては進んで構築している館と、なかなか進められない館があることが明確になりましたが、この報告が少しでも前に駒を進めるきっかけになればうれしく思います。

（大阪府立中之島図書館 門上 光夫）

### 【研究委員会発表(2)】

学校連携研究グループ  
「学校へのアウトリーチサービス  
～「人」・「資料」・「情報」を学校へ～」

学校連携研究グループでは、公共図書館が持つリソースを学校へ届けようとする活動を、広義の意味で「アウトリーチ」ととらえ、「人」「資料」「情報」の三つに分類し、事例を紹介しました。

まず「人」のアウトリーチの一つ目「出張おはなし会」に関して、豊中市では、支援学校に対して、担当者、ボランティア、学校との信頼関係を大切にしながら徐々に対象を拡大し継続してきました。枚方市では、訪問する図書館員にとっても、地域や子どもを知る機会となっています。大阪府立図書館は、主に支援学校にヒアリングし、要望の把握に努めています。人材育成や業務負担を課題としながらも、読書活動の推進のためには継続が重要と考えています。

二つ目「出前講座」に関して、和泉市では、調べ学習の講座を小・中学校で実施しています。今後、まずは出前講座を知ってもらうための活動をしたいと考えています。泉佐野市では子ども司書講座等、5つのテーマで講座を行っています。人員調整等の課題はあるものの、今後充実を目指しています。

「資料」のアウトリーチには「貸出セット・団体貸出」や配送を支援する「物流支援」、「遠隔地等移動図書館巡回」があります。「えほんのひろば」は、面展台を用いて本の表紙を見せて並べ、本との出会う場を作る催しです。河内長野市では、図書館と社会教育課担当が連携して調整を行い、これが事業継続できた理由にもなっています。図書館に来館しない子どもたちと触れ合う機会となり、子どもの本への関心が高まりました。

「情報」のアウトリーチの一つ、茨木市の中高生のおすすめ本リスト「推し本」は中高生自身がおすすめる本をリスト化する取組です。箕面市「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」は、子ども自身が選ぶ子どもの本の賞で、授賞式では、受賞作家によるスピーチ等を行っています。

「アウトリーチサービス」は多岐にわたりますが、学校に対する資料提供等からサービスを充実する方法もあります。また、学校との関係性構築も重要になってくると考えます。

今回の発表が、今後の業務や課題解決の参考になれば幸いです。

## 【基調講演】

### 地域から事業を構想する

前県立長野図書館長 / 元伊那市立図書館長  
平賀 研也 氏

#### 1. イントロダクション

2013年の大阪公共図書館大会で「10年後あなたの町に図書館はありますか？」というテーマで、「情報の姿」が質も量も変わる。「いかに知るか」が変わる。「なぜ知るか」を変える必要がある。「知りたい」と、どうしたら思ってもらえるのか。新しい情報環境に恐れず、地域らしくチャレンジすること。「情報と情報」、「情報と人」、「人と人」をつなぎ直すことが大切である等の話をした。

#### 2. 大会から10年経過して

情報の探索が劇的に変わった。知るプロセスの変容やデジタルシフト等、単なる道具が変わるのではなく我々の行動自体が変わってきている。利用者側の環境や価値観が変わってきていることも考慮していかなければならない。地域・公共・図書館をどう考えるかについても、通常思い浮かぶ図書館同士の連携等とは違う視点で「何」とつながるか考える必要がある。「図書館を利用してくれる、作ってくれる市民」とどうつながるか考えることにより、地域の知的政策、想像力を高め、地域力（自治力）を高めることにつながるのではないかと。そこに暮らす皆と共に作ることもありうる。「情報と人」、「人と地域」をつなぐことが大切になってきた。情報を消費するところから、皆で作るところへ。大阪市立図書館の「思い出のこしプロジェクト」の取組とその10年後を紹介。

#### 3. さまざまな社会的要請

環境変化を受け、求められるサービスメニューが増えた。社会的要請（DX、課題解決、デジタル、市民参画等）が山のように降ってくる。予算も人も増えない中、全ての看板を掲げるには無理がある。メニューだけをどんどん受け取られ、誰かがやっていることを探して模倣し、言われたことをただやっても続かない。地域によって課題は違う。目の前の課題を見て、芯を食った課題を1つ見つけて膨らませ、増やしていく。「技能」「理念」でもなく「何をめざすか」が必要である。筋のいい選択をしていけば、全てのメニューを並べなくてもいい。

#### 4. 資源は有限（情報・人・空間）

臨床の経験をどれだけ持っているかが大切。県域の広い範囲、県全市町村が使えるような、わくわくするものを共有したい。「共知共創の知のコモンズ（共有地）」づくり。伊那市立図書館の「薪ストーブのある図書館」や、「ぶら・りぶら」、「高遠ぶらり」等の取組を紹介。

#### 5. デジタル・ウェブ・オープン

我々の行動様式が変わり、デジタル・ウェブ・オープン抜きに図書館は考えられなくなっている。今や子供達の見ているものは、文字だけでなく色々な要素が入っている。情報・知識の形が変わり、知るプロセスが変わった。探索の入口の情報はパソコンの中に入ってしまった。本とはなんなのか考えないといけなくなっている。

#### 6. どんな誰と共に？いかに？

アーカイブも国、県レベルは既に意味づけされているが、「他人事」と捉えがち。市町村、個人レベルの蓄積された知の情報にまで小さくなってくると「自分事」になってくる。個人レベルは「自分事」として受け止めやすい。楽しさのある、「自分事」になる「関わりしろ」を作り、「ゆるいつながり」で集まり、学び合う楽しさを生み出す試みを模索しよう。

#### 7. 地域の知のコモンズとしての図書館

小さく弱いつながりを起点に組織をつくるのが大切。そこに至るまでのプロセス（どういう体験をするか）をデザインすることを大事にする。参加した人が「自分が関わっている」と思える仕組。「関わりしろ」があること、参画できる余地があることが大切。大きなストーリーにむけ、仮説をおいて試行錯誤を繰り返す。色々な芽があれば試してみる。その土地や風土に応じたものの枝葉を広げよう。知の共有地を一緒に考えてゆくつながりを地域に作ることも一つの道。地域に応じて役割はある。地域の暮らしの基盤を整える役割の図書館もあれば、地域館市町村立図書館等は、そのコンテンツを共に作っていく活動をいかに作るかということも大事。情報を提供する機関同士がつながることも大事だが、地域にある公共図書館は、地域の中にある情報と情報のつながり方を新たにすること。情報と人のつながり方を新たにすること。その結果、地域の人と人を、つながりを新たにしていくこと。そういうことをめざして楽しく、試行錯誤してみたいのではないかと。

※「Slide share」でレジュメ閲覧が可能です。

### 【事例報告 1】

#### 地域をつなぐ三館連携「津山モデル」

津山市立図書館 館長 菊入 典子 氏

「津山モデル」は、2008年に開始された、津山市立図書館（公立）、美作大学図書館（私立）、津山工業高等専門学校図書館（国立）の設置母体の異なる三館が連携し、資料の相互利用等を行うサービスである。

「津山モデル」の特色の一つは迅速な配送だ。各連携館が市内4kmに収まるコンパクトな立地を活かして図書館の配送車が毎日巡回し、午前中に予約した資料を当日受け取ることができる。

人や予算が足りず不安のスタートだった、と菊入館長。だが、図書館の果たすべき役割に真摯に向き合い職員の意識改革に取り組んだことで、「津山モデル」は市民の日常に定着した。連携館からの評価も高く、大きな意義を感じている。資料の貸出にとどまらず、人材の交流やサテライト貸出システムの利用など、連携の成果は確実に広がっている。

### 【事例報告 2】

#### 守山市立図書館の病院連携事業

守山市立図書館 管理係長 天谷 真彦 氏

琵琶湖湖畔に面する守山市では、2013年の市立図書館と市内がん相談センターとの職員交流事業をきっかけに、翌年「がん相談支援センター出張相談」を開始した。「公共図書館がん情報提供事業」へも参加しがんへの理解を深める事業を実施した。

2019年、守山市と滋賀県病院事業庁との連携協定の締結により、総合病院での「移動図書館」を開始。1か月に一度、院内で出張貸出を行う。

この他、「がん教室 まなびや」では県立総合病院と図書館で交互にがんに関する講演会の開催、エビデンスを重視した「健康医療情報コーナー」での情報提供、「がん患者サロン」で交流の場づくりも行うなど、様々な取組を続けている。

このような密接な連携を可能にしたのは、図書館と総合病院が川を挟んで隣同士という立地の好条件もある。今後もニーズに合わせて柔軟に連携を続ける方針だ。

### 【事例報告 3】

#### 泉大津市立図書館の営業活動 ―行政、議会、企業連携―

泉大津市立図書館 館長 河瀬 裕子 氏

泉大津市立図書館は、行政、議会、企業等と連携し、地域の特徴を活かした多彩なサービスを展開している。

①ビジネス支援サービス、②多種多様なイベント、③学校支援サービスを3つの柱としており、ビジネス支援サー

ビスでは、博物館展示機能を活かした地元企業のリソース活用やセミナーの実施、議会図書室支援では、議員へのレファレンスや展示で行政と議会をサポートしている。

商業施設内に新設された館内は誰もが自由に過ごせる空間として設計され、ユーザーイノベーションを想定した企業連携にも積極的だ。

また、子どもたちの意見を取り入れ「こどもの読書活動推進計画」を初めて策定、教育関係だけでなく行政の多数の部署が関係者として名を連ね、学校支援サービスに取り組んでいる。図書館サービスを活かした営業力で、連携先との win-win な関係が生まれていた。

### 【意見交換・質疑応答】

事例報告のあと、それぞれの講演をふまえた意見交換と質疑応答が行われた。

最初に平賀氏から、ネット上で確かな情報が得られる今、あえてリアルな場所での人による紙資料の情報提供を行う必要性とは何かとの問いかけがされた。

天谷氏は、人との関わり合いなど福祉としての位置づけが図書館には求められているのではないかと話された。河瀬氏は、紙とデジタル情報どちらも提供する工夫として「デジタル資源カード」の取組みを紹介された。菊入氏は、学校では紙資料の利用も多く、必要な本を選択して届けることの意味は大きい一方、今後はデジタルに繋いでいく工夫が必要と感じると話された。

また、図書館を利用しない人たちに図書館の有用性を理解してもらうための助言を求める質問者に対しては、河瀬氏は、読むことの多様性を指摘し、疑問を持つ→調べる→アウトプットするという知のサイクルの拠点として図書館を打ち出したと回答。平賀氏は、活字を読むだけでなく、何かを「知る」ことへの意欲の喚起を考えるべきではないか。情報の提供に加え、新たな情報をつくるコミュニティの基盤となることを新たな図書館像として示していくことも考えられると話された。

デジタル情報や、地域の様々な関係機関・専門家等のリソースを結びつけ、知り、新たな情報を生み出す拠点としての図書館像を考えさせられた。



※記名のない報告は会報委員の執筆です。